海景

バスのガラスをぱらぱらと打つ雨滴
その向こうに映る、ぼやけた風景
灰色に揺れる海面に白い泡が見える
だが、憂鬱であるようには見えない

骨ばった島国を放浪することは
骨の折れる作業であるには違いない
なのに、俺を駆り立てるものは何だろう
満たされ得ぬ虚栄の餌食になるためか
告白を許さぬ―――あの海原

お前は何と冷徹極まりないのだ
俺と、もう一人の俺が共食いをし
ずたずたな切れ端となる様を見ている
眼差しと言うものを持たず
ただひたすら覆い包むことを準備する
そのことで一切の妥協を洗い流す
飽くこと無き溶解―――

バスには数人の乗客が居た
生活の形というものが座っていた
強いられた生命と言う者は居ない
偶然と言う奇跡だけがある
選ばれた生命というものがある

狭い砂利浜がずっと続いている
弓なりに反ったまま、ずっと―――

何故、涙が流れるのかわからない

生き続けることができたこと
そのことだけが残っている
静かに寄せる波がそれを語り
雨粒がそれを翻訳している

(2012.7.2)